

## 六波羅蜜寺地藏菩薩像と運慶建立の地藏十輪院

《キーワード》 康慶 玉眼 五輪塔

三宅久雄

### はじめに

鴨川の東、東山山麓にある六波羅の地は、古くからの墓地の入口にあたり信仰を集めてきた。平安時代後期には、平家一門の屋敷がこのあたり一帯に建ちならぶようになっていった。やがて平家が滅び、代わって政権をとった鎌倉幕府はこの地に重要な出先機関、六波羅探題をおいた。六波羅蜜寺はそうした地であり、平安時代以来の仏像を伝えている。とくに鎌倉時代に入って、東国武士のための仕事を多く行った運慶率いる慶派の仏像が多く残っていることは、こうした当地の歴史を反映したものと考えられる。

寺内の十輪院に祀られていたと伝えられる現存の地藏菩薩坐像(図1)は、古くから運慶の作と言われてきた。また運慶が洛中八条高倉に建てた私寺、地藏十輪院の本尊であったという伝えもある。この地藏十輪院旧本尊説についてはともかく、作者については運慶と断定する研究者も多く、少なくとも否定的な意見はみられない。

しかし、具体的な制作時期をはじめ、この像の見方は必ずしも一定ではない。筆者もかつて簡単に私見を述べる機会があったが、その後、運慶作という立場から、建久七年(一一九六)をあまり下らない頃に亡くなった父康慶の菩提のために造像したのではないかという考えを述べたことがある。<sup>②</sup>ただ概説書であったので詳細には論じられなかった。これは二〇〇四年のことであったが、その後、興福寺の仏頭が運慶の作と判明し、<sup>③</sup>また最晩年の運慶作品も発見され、<sup>④</sup>既に話題を集めていた足利義兼関係の大日如来像二体とともに、<sup>⑤</sup>運慶研究は活況を呈してきた。またごく最近、六波羅蜜寺の仏像について詳細な調査が行われ、その報告もなされた。<sup>⑥</sup>これを機に、これらの調査研究に学びながら、あらためて六波羅蜜寺地藏菩薩坐像についての考えをまとめておきたい。

## 六波羅蜜寺と地藏十輪院

六波羅蜜寺には遅くとも江戸時代には十輪院という堂があり、運慶、湛慶合作と伝えられる地藏菩薩像が安置されていたことがよく知られていたらしい。

『山州名跡志』卷之三六波羅蜜寺の項に次のとおり記されている。

十輪院、在開山堂北、本尊、地藏菩薩坐像二尺五寸許、作運慶、湛慶兩作、脇壇左運慶像坐像二尺五寸許自作、右湛慶同上自作、本尊造立ノ起ハ、或時運慶ガ夢ニ、渺々タル野径ニ行クコトアリ其時忽然トシテ、貴僧出現セリ、慶心中ニ思ク、是只人ニアラズト、此僧慶に向テ宜ク、汝日頃地藏菩薩ノ像ヲ造レリ、然レドモ未其相好アタハザル處アリ、此故ニ其相ヲ見セシム、我ハ是地藏菩薩ナリトテ、光明ヲ放テ、暫彼妙相ヲ見セシメ忽然トシテ失玉ヘリ、慶覺テ後感涙袖ヲ潤シ、貴敬ノ掌ヲ合ス、終ニ湛慶ト共ニ其真影ヲ寫ス、此本尊是也、縁起意、此尊ノ相形、左手ニ宝珠ヲスユ、右手ニ錫杖ヲ持、蓮台ヨリ左ノ足ヲ下シ玉ヘリ、是ヲ延命地藏ト号ス

これによると十輪院本尊地藏菩薩像は像高約二尺五寸の坐像で、脇壇には左に運慶像、右に湛慶像が祀られていた。この本尊地藏菩薩像は、運慶が夢に見た地藏菩薩の像を湛慶と共に造立して安置したものであると伝えられ、これには縁起が存していたらしい。そしてその形は左手に宝珠、右手に錫杖を持ち、蓮台に坐り、左足を踏み下げており、延命地藏と呼んでいたという。

次に六波羅蜜寺に蔵される版木のうちに『夢見地藏略縁起』が

ある。これには『山州名跡志』で伝えているような本尊の縁起が述べられている。それによると、運慶と湛慶が同時に同じ夢を見て、覚めて後にこの地藏菩薩の像を半身ずつ造って合わせた。そして永く随侍するために運慶、湛慶は各々自身の像も造って傍らに安置したというのである。

この『夢見地藏略縁起』ではさらに続けて次のような記載がある。夢見地藏と呼ばれて信仰を集めていたが、建保六年（一二一八）に炎上したので高雄山高山寺金堂に遷したが、嘉禄元年（一二二五）「六波羅十輪院」を再建し、もとの如くに安置したという。これは十輪院なる堂がもともと六波羅に存したようにもとれてはつきりしない。

ところで運慶は京都に地藏十輪院という名の寺を建てたことがわかっていて、『高山寺縁起』金堂条に次のごとく記される。

一本佛

中尊木像周丈六盧舍那如来 佛工運慶作

脇士十一面觀自在菩薩相伝之伝教大師本尊云々  
或説弘法大師御作云々

弥勒菩薩

四天王等身像各一軀 并各三尺侍者

持国天円慶作 改名運覚

增長天湛慶

広目天康運 改名定慶

多聞天康海 改名康勝

右本仏并四天王像者、本是洛城地藏十輪院運慶建  
立堂本尊也、而建

保六年、彼十輪院炎上畢、其後且怖洛中火難、且爲上人本尊運

